

さよならさくはなきえゆく  
あなた

chrcc

「俺、ね、死んじゃったみたいなんだけど」

唐突に、塚田さんが言った。

バイト先の更衣室で告げられるような内容の話ではない気がした。

は、と塚田さんを振り返れば、どうしようねえ、と、僕には到底どうしようなどと思っているようには見えないように、へらり、と笑った。

「莫迦なこと言っていないで、早く着替えて下さいよ」

塚田さんに言えば、無理だって、と、再び、へらりと笑った。

「だって、ほら、触れないし」

言って、塚田さんは僕の首元に腕を伸ばした。

僕の勤めているのは、チェーン展開している喫茶店だった。ウェイターの制服は、シンプルではあったけれどそのぶん仕立てが良い。さらりとした手触りのネクタイは、僕の首元からぶらりと垂れ下がっている。

塚田さんの指は、僕の首から下がるネクタイに触れようと近づく。

その指先がネクタイの黒色に触れても、僕の胸元には触れられた感触が残らなかった。視線を落とせば、塚田さんの手首しか見えなかった。手首から先、手や指は僕の身体の中に消えていたのだ。

「マジですか」

ひくりと唇の端が引きつった。

「マジです」

「え、あー、もうっ、ちょっと考えますから待っててください、ねっ」

混乱していると自覚した僕は、ええとええと、と呟きながら、益々混乱する思考を、せめてその場で留めさせ、その先にある深い混乱の穴の中にまでは引きずり込まれぬ様に、深呼吸をした。

吸って、吐く。吐いて、吸う。すう、はあ、すう、はあ。

「茂木くん、さあ、落ち着いたら色々お願いあるんだよね」

バイト、さぼってくんないかなあ。

桜の蕾の色付き始めた公園を通りすぎ、塚田さんの部屋まで来て、僕は愕然とした。

「マジで、死んでるじゃないですか」

畳の上に横たわる塚田さんは、青白い顔で目を閉じていた。安らかな、というのはこういう死に顔をいうのかと思えるほどである。唇は笑みの形で、青くなっていた。

静かに、ゆったりと閉じられたのであろう瞼は今にも動き、その下の眼球が僕を見つめてくれるのではないかと期待しながら、僕は後にいた塚田さんを見遣った。幽霊とか魂とかいうものらしいこちらの塚田さんは、ね、と首を傾けた。ね、死んでるでしょう。

「どうしたらいいんですか、俺」

同じ部屋に死体があるというのに、僕は酷く冷静であった。隣に、生きているのと変わらない塚田さんが、ふよふよと浮いているからかも知れないが、よくよく考えればそれも随分おかしな状況である。

「取りあえず、110番に掛けてもらって、あと俺の実家にも連絡して、それからウチの店と、大家さんも、か」

僕にして貰いたいことを一つずつあげていきながら、塚田さんは指を折る。四本の指を折り

曲げ、小指を残したところで、ぴたりと動きをとめた。

うーん、と唸った後に、小指を曲げたり伸ばしたりする。

「なんですか」

曲がったり伸びたりする塚田さんの小指が気持ち悪くて、止めさせるために掴んでやろうと腕を伸ばして、止めた。この塚田さんには、触れられない。

「もう一個は、いいや」

塚田さんは、両手をぱんと腰に宛った。

「なんすか、言って下さいよ」

「いって、茂木くんに迷惑かけらんないし」

「もう充分かけられてるんですけど」

「や、だから、これ以上は掛けられないな一、って」

「いいですって、言って下さい、未練があったら成仏できませんよッ」

窓を閉め切った塚田さんの部屋に、わあんと僕の声が響いた。木造アパートで壁が薄いらしいこの部屋で叫んだ声は、しっかりと隣部屋にまで響いたらしく、がつんと隣部屋の住人が壁を叩く音がした。静かにしろ、ということらしい。

黙り込んだ僕の耳には、僕以外誰の呼吸の音も届かない。塚田さんが死んでいるのだとただただ実感するしか出来なかった。

死んでいる塚田さんと、死んでいるのに動き喋る塚田さん、僕の前には二人の塚田さんが居て、どちらも紛れもなく本物で、それなのに、僕は何故か寂しい、と思った。この部屋に一人きりで居るような生易しい寂しさではなく、この世の中に一人きりになってしまったような深い寂しさである。

僕はいたたまれなくなり、110、とボタンを押して、携帯電話から警察に電話を掛けていた。何がありましたか事件ですか事故ですか、と尋ねる警官に、知り合いが死んでるんですけれど、と告げ、問われるままに塚田さんの部屋の住所や、僕の名前や今の状態を説明した。今から向かいますので、その場で待機して下さい。そう言った警官の言葉で、通話は終わった。

「でも、さ」

僕が携帯電話をポケットに押し込んでいると、ふいに塚田さんが、口を開いた

何を言い出すのかと、塚田さんの瞳をじい見つめれば、その瞳には安らかな死に顔の塚田さんが映っていた。

「俺、すぐに成仏しちゃわなくて良かった」

すぐに成仏したら、茂木君のこと好きなの嘘みたいだし。

塚田さんの呟きに、僕は間の抜けた声で相槌を打った。はあ、とも、へえ、ともつかないとても間の抜けた声だった。

「茂木くんと、ちゅうとかえっちとかしたかったし、お花見にも海にも行きたかったし、あ、その前に、ちゃんとした高校生みたいな告白、したかったなあ」

塚田さんの言葉が、上手く耳に入ってこなかった。耳には入っているのだろうが、咀嚼して飲み込めない。遠回しに、好きだと言われていると思って良いのだろうか、僕は首を捻るが、分からなかった。

その場に漂い始めたのは気まずい雰囲気であったから、僕は立ち上がって窓まで歩み寄った。そういえば、ここに来る途中の公園では、桜の蕾が今にも綻びそうに膨らんでいた。

「お花見、しましよよ」

咲いてなくてもまあ仕方ないですよ。

そう言って、振り返れば、そこには目を閉じた青白い塚田さんしか居なかった。

塚田さん、と呼んでも、返事など無い。横たわっている塚田さんの瞼が、微かに動いた様な気がして凝視してみるが、どうやら気のせいだったようである。

「塚田、さん」

呼んだ。塚田さん、塚田さん、と二三度呼んで、諦めた。何度呼んでも、そこで横たわる塚田さんが、何茂木くん、と声を発しないことは分かっていた。

僕は、窓を開けたまま暫く惚けていたらしい。エンジン音に我に返れば、直ぐそこまでパトカーが来ているのが見えた。

警官がこの部屋に来る前に、僕にすべき事があるならば、たったひとつこれだろうと、思う。

僕は、青白い塚田さんの唇に、キスを、した。

俺だって、ちゅうとかえっちとかしたかったし、花見も海も行きたかったし、好きだって、言いたかったんですけど。どうせ聞こえていないのだから、馬鹿正直に、僕は塚田さんの耳元で囁いた。

「何、死んでんすか」

せめてあと一週間と少し生きていてくれれば、キスもセックスも花見も海も告白も、全てしてあげられたのに。

もう一度だけ、キスをして、僕は警官が来るのを、動かない塚田さんの側で、待っていた。